

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 6月 1日現在

機関番号：12601

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21720253

研究課題名（和文） 中世アラブにおけるイスラーム寄進制度（ワクフ）の社会的機能

研究課題名（英文） The social functions of Islamic religious endowment (waqf) system in medieval Arab world

研究代表者 五十嵐 大介（IGARASHI DAISUKE）

東京大学・大学院人文社会系研究科・客員研究員

研究者番号：20508907

研究成果の概要（和文）：イスラームの宗教寄進制度（ワクフ）は、前近代のイスラーム世界各地で広く普及したが、その理由としては、それが信仰心や利他的な善意のみに支えられた単純な「慈善行為」ではなく、寄進者たちにとってそれを通じて獲得できる、より現実的・利己的な動機があった。本研究では、現存するオリジナルの寄進文書を主な史料として用いて、ワクフ制度が中世アラブ社会で果たしていた多面的複合的な機能を明らかにするとともに、それが寄進者たちの個人的社会的状況に応じて戦略的選択的に利用されていたことを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：The popularity of the waqf (Islamic religious endowment) system throughout the premodern Islamic world cannot be attributed simply to its characteristics as a “charitable act” supported by altruism and benevolence. Waqfs have been established by people out of more realistic and self-interested motives. By using original waqf deeds as main sources, this study reveals the multifaceted and complex functions performed by the waqf system in medieval Arab society, as well as how the waqf system was strategically and selectively utilized, depending on the personal and social circumstances of endowers.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2010年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学、東洋史

キーワード：西アジア・イスラーム史

1. 研究開始当初の背景

イスラーム的慈善として農村や都市の不動産を特定の宗教・慈善施設／活動に対して寄進するワクフ制度は、前近代においてイスラーム世界各地で都市の発展や学問・文化の振興に寄与し、社会的に大きな役割を果たし

たのみならず、現代においても形を変えながら、宗教的慈善を実践する一つの手法として生きている。いわばワクフ制度は、イスラーム社会を構成し、成り立たせている最も重要なシステムの一つと言えよう。しかし、ワクフ制度それ自体は、その制度的枠組みがイス

ラーム法的に規定されてはいるものの、それがいかに利用され運用されていたか、またそれが当該地域の全体的な経済・社会活動の中でいかなる位置を占め、いかなる役割を果たしていたかは、時代や地域によって多様である。イスラーム法理論を基にした理念的な「ワクフ制度」理解を離れ、個別の研究蓄積をもとに、実証的研究に根差した総合的なワクフ制度論へと統合するためには、各時代・地域ごとに個別のワクフに関する具体的な情報を積み重ねていくことが第一に求められる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、中世アラブ世界(特にマムルーク朝期(1250~1517年)エジプト・シリア)において、イスラーム寄進制度(ワクフ)の果たした社会的機能を多面的に明らかにすることにある。特に、14世紀後半を境としたワクフ制度の発展とその実態を、それを取り巻く当時の社会的状況との関わりの中から把握することを目指す。特に以下の二つの問題について取り組むことを当初の目的とした。

(1) ワクフ寄進行為の持つ社会的意味

ある時代・地域に生きた実際の人間が、どのような時に何を望んでワクフ寄進という行為を選択したのか、あるいはそれがその人物の生涯・活動とどのように関わっていたのか、個別具体的事例に即した研究を通じ、イスラーム社会の個々の構成員にとってのワクフ寄進行為の持つ社会的意味について考察する。併せて以下の三点について留意する：

①スルターン、軍人、軍人の親族・子孫、官僚、ウラマー(イスラーム知識人)、商人その他の富裕者等のワクフを相互比較し、社会階層・集団ごとのワクフの傾向と特徴を示すとともに、各々の集団にとってワクフがいかなる意味を持ち、いかなる役割を担っていたかを考える。

②受益者や管財人等として現れる寄進者の妻子、親、兄弟姉妹、妾、奴隸、その他の人物の情報から、寄進者を取り巻く人間関係と家族形態を考察するとともに、ワクフ制度がイエ・家族・人間関係の形成・維持・強化に果たした役割を考える。

③14世紀中頃以降頻発した黒死病(ペスト)の蔓延が、人々の死生観に何らかの影響を与えたとの仮説を基に、黒死病流行前後におけるワクフの特徴と変化の有無を考察する。それを通じ、この時代に人々が生と死といかに向き合い、その中でワクフ制度がいかなる役割を果たしていたかを探る。

(2) ワクフ制度の運用の実態

ワクフが現実がいかに運用されたか、実態の把握に努める。特にヌズール、代理制度、

イスティブダール(交換)制度の三つに注目する。ヌズールとはワクフ関連ポストの譲渡を指し、しばしば金銭の授受が伴った、事実上の売官であった。代理制度は、ポストを占める人物が実務を代理に委任するものであり、職名と実務の解離を招いた。また、ワクフの受益対象である宗教施設の維持運営のための財源として寄進された物件(=ワクフ財。土地や建物など)を金銭や他の物件と交換し、私有財へと戻すイスティブダールは、それを通じて荒廃したワクフ財物件の再生を促すとともに、ワクフ財と私有財との流動性を保ち、ワクフを通常の経済活動のサイクルに組み込むという、経済面で重要な役割を果たした。いわば永続的寄進というワクフの建前と、ワクフとされた物件も時間の経過とともに資産価値の低下を免れ得ないという現実を整合させる、ワクフが普及した社会において不可欠な制度である。これらは理念的なワクフ制度理解を離れ、その実際の運営に迫る手がかりとなると考える。

3. 研究の方法

(1)文書史料、(2)叙述史料、(3)法学史料の三系統の史料を併せ用いる。

(1)マムルーク朝期エジプトのワクフ文書は、カイロの国立公文書館(Dar al-Watha'iq al-Qawmiya)およびワクフ省文書局(Wizarat al-Awqaf)に多数保管されている。これらの機関で史料調査を実施、文書を直接閲覧した。またシカゴ大学図書館で入手した文書のマイクロフィルムも利用した。それらを一つ一つ読み進めていき、含まれる情報を抽出、整理、分析した。

(2)マムルーク朝時代については、年代記や人名録といった叙述史料が多数残されている。こうした史料の校訂された刊本および未校訂の写本を丹念に読み込み、関連情報を抽出した。加えて、文書史料の読解から明らかになった、寄進対象の宗教/公益施設(モスクや学院等)、財源として寄進された物件(土地や建物)、人物(寄進者、受益者、代理人、管財人等)等の情報について、叙述史料から裏付けを取り、文書の情報と比較考察した。

(3)ワクフに関する法理論書・ファトワー(法的意見)集を用い、当該時代・地域で主流となっているイスラーム法上の法解釈を把握した。また16世紀末の法学者 al-Munawi が著した、この時代のワクフ理論の集大成とも言える『ワクフ要覧 Taysir al-Wuquf』を史料として利用し、この史料を14~15世紀のワクフに関する法理論書・ファトワー集と比較することにより、その理論的発展の過程とその背後にあったワクフ制度の現実の変化を検討した。

4. 研究成果

(1) 宗教的な「慈善」と位置づけられるワクフが、実際には寄進者個人の財産保有手段としても大いに利用されていた事実を、ワクフ文書と法学書を用いて明らかにした。

(2) マムルーク朝時代のワクフ文書の様式とそこから読み取れる特徴をまとめ、事例研究としてスルターン・シャイフ(1421年没)のワクフ文書を研究、発表した。

(3) 寄進者個人にとってワクフ寄進がどのような意義を持っていたか考察するため、15世紀後半のマムルーク朝アミール(軍団長)・キジュマースのワクフ文書を用いた事例研究を実施した。文書史料から寄進物件の入手と実際の寄進の日付、物件入手先とその手段、物件の種類、寄進対象、管財人その他の規定内容といった具体的な情報をピックアップし整理した。平行して、同時代の年代記や人名録といった叙述史料を精査し、彼のライフ・ヒストリーを再構成するとともに、それをワクフ文書の情報と重ね合わせ検討した。それを通じて、彼のワクフの実態と特徴を明らかにするとともに、彼がライフ・コースのいかなる段階でいかなる背景のもと何を望んでワクフ寄進を行うという選択をしたのかを多角的に考察した。

以上の考察の結果、ワクフが個人の財産保全、子孫への利益供与、為政者としての公益振興、都市開発、個人あるいは政権の威信の誇示、ペストの流行や社会不安に起因する善行意識の高まりや死後の救済の望みなど、個人的、政治的、宗教的な様々な目的のもと戦略的・選択的に設定されていたことを指摘し、ワクフ制度の持つ多面的機能を明らかにした。

以上の研究成果は論文として発表するとともに、イスラエルおよびベルギーでの国際会議でも報告した。報告は欧米・イスラエルの研究者たちから大いに称賛され、海外の学会におけるワクフ研究およびマムルーク朝研究にインパクトを与えることができた。

本研究の成果は、前近代のイスラーム社会でワクフの果たした多面的な社会的役割を考える上で一つの基準となり、他の地域や時代の事例と比較研究を進める上で有効な視点と分析の枠組みを提供し得る。それは今後、近代に至るまでのイスラーム世界におけるワクフの役割と社会的位置づけの全体像を明らかにしていくための出発点となるものといえよう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

① 五十嵐大介 「14世紀末～16世紀初頭エジ

プトにおける土地制度の展開：ワクフ（寄進）地の拡大とその影響」

『史苑』第72巻第2号, 85-94頁, 2012年, 査読なし

② 五十嵐大介 「あるマムルーク軍人の生涯と寄進：キジュマースの事例に見るワクフの多面的機能」

『史学雑誌』第120編第3号, 39-65頁, 2011年, 査読有

③ IGARASHI Daisuke, “The Evolution of the Sultanate Fisc and al-Dhakhirah during the Circassian Mamluk Period.”

Mamluk Studies Review, Vol. 14, no. 1; pp. 85-108; 2010, 査読有
(<http://mamluk.uchicago.edu/msr.html>)

④ 五十嵐大介 「財産保有形態としてのワクフ：「自己受益ワクフ」の理論と実態」

『東洋学報』第91巻第1号, 75-102(029-056)頁, 2009年, 査読有

[学会発表] (計3件)

① 五十嵐大介 「14世紀末～16世紀初頭エジプトにおける土地制度の展開」

2011年度立教史学会大会・特集「中世史研究の現状と課題」, 立教大学池袋キャンパス, 2011年7月2日

② IGARASHI Daisuke, “Religious

Endowments of the Mamluk Amir Qijmas al-Ishaqi”
20th Colloquium on the History of Egypt and Syria in the Fatimid, Ayyubid, and Mamluk Eras (10th - 15th centuries); May 13, 2011; Ghent University, Ghent, Belgium

③ IGARASHI Daisuke, “Waqf as a Means of Holding Assets: The “Self-Benefitting Waqf” in Mamluk Egypt.”

International Conference on Egypt and Syria under Mamluk Rule: Political, Social, and Cultural Aspects; April 12, 2011; The University of Haifa, Haifa, Israel

[図書] (計2件)

① 五十嵐大介, 刀水書房, 『中世イスラーム国家の財政と寄進：後期マムルーク朝の研究』, 2011年, 330頁

② 中央大学人文科学研究所(編), 中央大学出版部, 『アフロ・ユーラシア大陸の都市と宗教』, 2010年, pp. 199-241

6. 研究組織

(1) 研究代表者

五十嵐 大介 (IGARASHI DAISUKE)
東京大学・大学院人文社会系研究科・客員
研究員
研究者番号：20508907

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：